

みやさぽ通信



VOL.

11

2024年12月11日

<https://www.miyasapo.net>
e-mail : nakashima-e@miyasapo.net

認定NPO法人 みやっこサポート

〒662-0034 西宮市西田町6-5
TEL 0798-81-5301



ホームページ



FACEBOOK



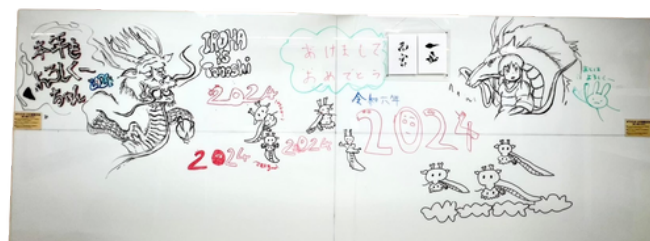
YOUTUBE

辰年が明け、良き年をと願う間もなく能登半島地震という大きな試練がありました。少子化が急激に進み、人材不足や財源不足が深刻な社会問題となっている日本は、時を選ばない自然災害の恐怖にも備えなければならないという現実を突きつけられた気がしました。

しかし歴史を見ても、人類は、自ら招いたものそうでないものに関わらず、何度も大きな試練を乗り越え、私たちが今ここに存在しているのも事実です。

「諦めず皆で知恵と力をあわせていけば乗り切れる」と人の力を信じ、自分たちのできる最善を尽くしていきたいと思います。

私たちは9年前、これからは行政に頼るだけではなく「一人ひとりが自分にできることをしていかなければ、この社会は支えられない」と活動をはじめ、まちにあるニーズに向き合い活動を進化させてきました。その中で見えてきたのが、『NPOの仲間』(P6~9)のコラムで『神戸ライフ・ケア協会』の方々が話されたように、日本の地域福祉はNPO活動に支えられていながら、その活動を支える仕組みがない。ほとんどのNPO団体が厳しい運営の中で志だけで踏ん張っているという現実でした。



こども達とボランティアさんの新年アート



こども会議の様子

『声』(P12)のコラムの、学生ボランティアの咲楽さんのメッセージにも書かれているように

「今日本に必要なのは人の力(強み)を合わせる」こと。
そしてNPO活動を支える仕組みをつくること。
次年度には、その解決・緩和につながる一つの案を進めるべく取り組んでいきたいと思います。

今年の5月には、このこども達の第三の居場所を守ることと、サポートを必要とする多くのこども達を受け入れることを目標に、放課後等デイサービスを開所しました。

これからも、明るい未来を諦めず、こども達と皆で力を合わせ取り組んでまいります。
皆さまの温かなお力添えを、どうぞよろしくお願いいたします。

認定NPO法人みやっこサポート 理事長 中島 恵美



こども支援

こども達の良き個性をのばす！

フリースペース IROHA
学校に行かない、行きたくない
こども達が楽しむ居場所

活動：月・水曜日 9:00～15:00
97回
のべ参加人数：こども 1,060名
ボランティア 256名



IROHAらば
学校に行かない、行きたくない
こども達の学び場

活動：火曜日 10:30～12:00
42回 13:00～14:30
内容：衣装作り、英会話、ギター
料理、ボードゲーム
人数：こども のべ 240名参加
講師・スタッフ 141名参加



無料学習教室

楽しく勉強するこどもの居場所は
2023年2月23日より休止
永くこの活動を支えてくださった
木谷先生が旅立たれました
4・5頁に追悼記事を書いています

IROHAブランド

こども達と、この居場所を運営して
いくために立ち上げたブランド

■IROHACURRYの販売

活動：8/4～第1金曜日 4回
参加人数：27名

■IROHA食堂（出店）

活動：7/29 ノーラマルシェ
8/6 大社小学校盆踊り



みやっこ食堂

こどもたちが、おなか一杯食べて、楽しく遊ぶ
こども食堂！

■ランチ

活動：月・火・水・金曜日 12:00～13:00 148回
のべ参加人数：こども 813名・大人 370名

■晩ご飯

活動：毎週金曜日/11月から月2回 38回
のべ参加人数：こども 1,216名・大人 238名



みやっこ弁当

活動：火曜日 58回
弁当数：2,618個
家庭数：32軒

※お弁当をいただく際のお願い
1. 必ずお弁当箱に名前を記入してください。
2. 必ずお弁当箱にアレルギー情報を記入してください。
3. 必ずお弁当箱に連絡先を記入してください。
4. 必ずお弁当箱にアレルギー情報がないことを確認してください。
5. 必ずお弁当箱にアレルギー情報がないことを確認してください。
6. 必ずお弁当箱にアレルギー情報がないことを確認してください。
7. 必ずお弁当箱にアレルギー情報がないことを確認してください。
8. 必ずお弁当箱にアレルギー情報がないことを確認してください。
9. 必ずお弁当箱にアレルギー情報がないことを確認してください。
10. 必ずお弁当箱にアレルギー情報がないことを確認してください。

お名前	お弁当箱	アレルギー情報	連絡先
山田 太郎	1	卵アレルギー	090-1234-5678
山田 太郎	2	卵アレルギー	090-1234-5678
山田 太郎	3	卵アレルギー	090-1234-5678
山田 太郎	4	卵アレルギー	090-1234-5678
山田 太郎	5	卵アレルギー	090-1234-5678
山田 太郎	6	卵アレルギー	090-1234-5678
山田 太郎	7	卵アレルギー	090-1234-5678
山田 太郎	8	卵アレルギー	090-1234-5678
山田 太郎	9	卵アレルギー	090-1234-5678
山田 太郎	10	卵アレルギー	090-1234-5678



生活サポート

地域で生活を支援する！

相談支援
(地域の相談窓口)
活動：月・水曜日
10:00～15:00

生活サポート
(家族代行サポート)
活動：随時
家庭数：1軒

食サポート
(フードパントリー)
活動：第1火・水曜日
23日

交流支援

仲間・楽しみをつくる！

金曜カフェ
(シニアの集い場)
活動：金曜日 32回
10:00～12:00

山登り
(スポーツで交流！)
活動：木曜 1回

歌の教室
(地域で楽しみづくり！)



活動：金曜日
13:00～14:00
21回

IROHAのこども達が
参加したイベント

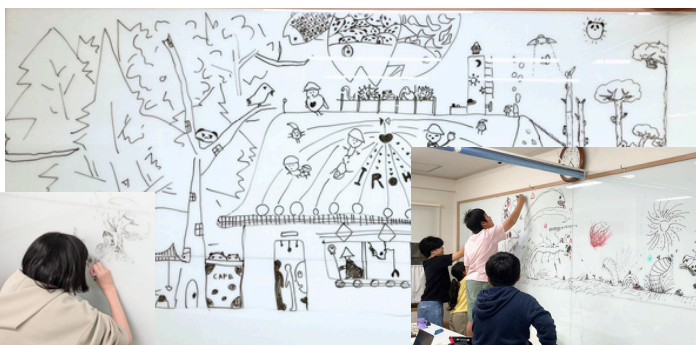


ラチェリアン放課後デイサービス開所



2024年5月1日。より多くの、スペシャルニーズのあるこども達や、支援の必要なこども達をサポートするために、放課後等デイサービスを開所しました。

開所日時：月～金曜日 平日14:00～17:00 休校日11:00～17:00



こどもと未来を創るプロジェクト

『にしのみやこどもフェスタ2024』開催！

2023年に、西宮でこどもに関わる活動をしている団体が集まり発足した『にしのみやこどもと未来を創るプロジェクト』が主催のイベント『にしのみやこどもフェスタ2024』の企画を実行委員会メンバーで進め、こども店長たちも準備を進めてきました。

去年の、こどもが主役のイベント『こどもマルシェ』から進化し、今年はダンスや太鼓などのパフォーマンスも参加。こども達が店に立ち、売り、計算し、踊り、太鼓を叩くイベントに、1000人を超える人が集まる大イベントになりました。

参加したこども達からは「楽しかった！来年は…」と、すでに来年の計画の話も出ています。これまで見たことのないキラキラ輝くこども達の姿、それを見て喜ぶ大人の姿。楽しさと元気と、たくさんの笑顔で公園はいっぱいになりました。こどもはすごい！

2024年11月17日(日) 10:00～14:00 西田公園にて



西宮流さんの
こどもフェスタの記事



足 跡 ～木谷先生を偲ぶ～

8年前、西田公園前に事務所を移転してすぐのころ、先生はそのドアを開けて「今、英語英語と言われてるけど、塾に行けない子はどうするのか心配なのよ！」と入ってこられました。

そして一緒に『みやサポ・イングリッシュ(後の無料学習教室)』を開始。

それが、私たちのこども達に関わる活動の始まりでした。

それからずっと、こども達の、私たちの傍には、先生がいました。

その先生が病気と闘われ、2023年7月5日旅立ってしまわれました。

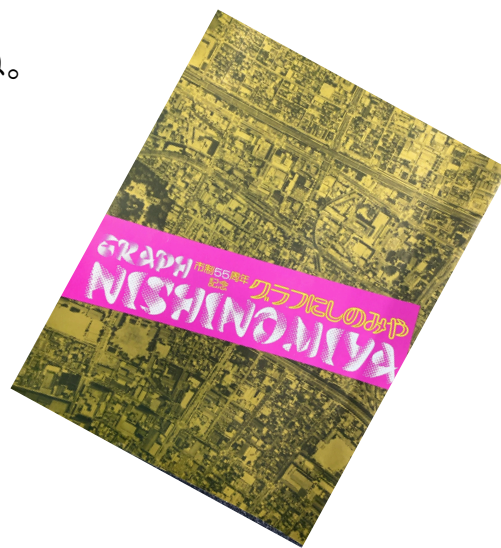
明るくて、楽しくて、いつもこども達の成長と一緒に喜んでくれて、どんなに感謝してもしきれません。先生、本当にありがとうございました。

これからもいつものように、私たちを見守っていてください。

先生の思いを後世につなぐために、その足跡をここに記録しておきます。

1980(昭和55)年当時の記念誌に、奥五一市長との懇談での木谷先生の話が掲載されていました。

思いはずっと変わらなかったんですね。



敬遠してしまっんですね。

心かよわせ子供も健やかに

木谷 それから今、子供を第三者的な立場から見ると大人というのがすごく大事だと思う。私らの小さい時は、近所のオバちゃんに「お帰り、今日田さん留守よ」とか声をかけてもらって、その人に「オバちゃん、今日、学校でこんなことあつてん」とか話すことができたけど、今の子供は家に帰ったら勉強せんとあかんし、おこられるし、余裕をもっと、自分の言いたいことを聞いてもらえる人が近くにいないのね。もしかしら、近所に、そういう人が出てくれば、子育てに経験の深い先輩の人との交流があれば、その子も助かるのになあと思ったりもします。

樽本 そうですね、そういう昔の長屋的な感覚がないですね。以前の話ですが、近所で雪の降る中を子供が震えながら立つてるんですね。聞いてみると、お田さんがカ

ものになるよう援助したいと考えています。

司会 木谷さんは投稿された教育論文の中で、「心が失われてしまっている」ことを書かれていましたが……

木谷 私は今の子供たちのことがとても心配なんです。自由に伸び伸びと育てられる環境でないんです。近所の子供に対しても何か愛情が欠けているんですよ。運動会や盆踊りもいけれど、結局行かん人は行かん。近所十人でも二十人でも集まれば「コミュニティだと思つて、まず近所の人が手をつないで、子供たちに「思いやり」という言葉が、ハタで感じ、味わい、大事や」ということがわかるような地域づくりが必要だと思う。

市長 昔で言えば、三々五々の「コミュニティ」やね。

増田 子供の遊び場を見ても、昔よく遊んだ空地が今は、鉄じょう網がかけられていたりしますね。子供の親の方は、空いている場所でも「いやな」とか、地主の方は、

2024.9.25 聞き手 中島 恵美 ライター 中川 智子

今年の春、放課後等デイサービスを開所するためにノウハウを教えていただいたのが、神戸ライフ・ケア協会理事長の神谷さんと生活介護マネジャーの有田さんでした。その時はじめて、活動を始めて43年も経つとお聞きし驚きました。

介護保険ができる前から介護を支えるしくみをつくられ実践。資金繰りにずっと苦労され、それを乗り越えるために知恵を出し合い、制度を利用し、でも国の制度変更のことごとくひっくり返され。それでも目の前の人を支え続けてこられた。神戸のNPO活動の先頭で活躍されている方にも、ここで経験を培った人もおられます。その地域福祉のパイオニアともいえる素晴らしい活動を一人でも多くの方に知っていただきたいと思います。

【全国で2番目にはじめた活動！】

神谷さん：私が1992年に（この団体に）入って33年になります。ちょうど団体の10周年の時で、その後2007年から3代目の理事長になって、もう17年になりますね。初代の理事長は今井鎮雄さんで、この方は、YMCAの顧問や社会福祉協議会の理事長、関学でボランティア論の先生をされたり、いろんなボランティア団体の設立に関わられていた方です。私達に「人間の幸福ってというのは、お金とかね、そういう効率化でいくもんじゃなくて、人と人との助け合いとかね、寄り添いの文化だ」ということを、常に話して残してくださいました。

『神戸ライフ・ケア協会のあゆみ』より



設立時の事務局長は土肥隆一さんというクリスチャンセンターの牧師さんで（元衆議院議員）、その方が「高齢化社会になってきて生活のちょっとしたことで困っている人がおられるから、主婦や地域の住民がお手伝いできるような団体をつくりましょう」と、住民参加型の在宅福祉サービスを始めたんです。（全国に先駆け、有償の助け合いを対等な関係でやることを始め組織化した）

高齢者や障がいのある方の生活支援サービスを有償ボランティアという形で提供して、料金は計算しやすいから10分100円で1時間600円、うち1割を事務費等に充てて、あとの2割を時間貯蓄。あとをボランティアの人が受け取るといった計算方法で、これは20年くらい変わらなかった。当時は、「ボランティアなのに有償ってというのは何事よ」「有償ボランティアはボランティアと違う」みたいな議論もあったんですよね。最低賃金とか、有償ボランティアが雇用関係に該当するのかといった議論はまだない時代でしたので。

【介護保険制度への参入】

神谷：そうやってきたんですけど、1997年に介護保険法が制定されて、2000年から介護保険制度が始まることになって、これは社会的に仕組み化されるので、それには入らないとあかんと思ったんです。

利用者の利便性が第一で、介護保険という制度が始まるから、利用者がその保険を使えないといかんよね、だから参入しよう、そのためには法人格取らなあかん。

でもね、内部から反対も出るわけです。「私らは法人格取ってお金をもらうためにこれまでやってきたんじゃない！」みたいなね。長いこと情熱を持ってやってこられた人たちが多かったから、自分たちのやりたかった理念が奪われるんじゃないか？お金儲けに走ってしまうんじゃないか？と思う先輩もおられたわけです。

なので、介護保険制度に入るかどうかというのを2年ぐらいみんなで議論してね。でも堂々巡りでなかなか決まらなくて。

そんな中でも準備は進めたんです。生活支援の有償ボランティアだったのが、介護保険に入るとなるとヘルパーの資格が要りますよね。だから「うちでもヘルパー養成研修をしよう」って、この事務所で2級の研修をしました。それまで有償のボランティアで行っていた人全員が切り替えられるように。

反対していた人も「みんなとにかく2級の資格は取ろう」ってここで研修受けて。2000年の4月1日、もうギリギリのところで終了式で。

それまでの有償のボランティアも決して質の低いことをやっていたわけではないですけど、でもやっぱり資格を取ったことで専門職として一歩踏み出せるというので、みんな嬉しかったです。



介護保険制度に入るかどうかの話し合いの最後はね、反対組の人からの「もうやったらええやんか、やろうよ」という力強い一声でした。結局、制度の中で運営する部門と、「やっぱり私はボランティアです」とやるよ」とっていう人には制度外サービスでサポートする部門も残して、両輪でやっていくようにしてね。利用者の事情にあわせて、組み合わせて使うこともできますしね。

ありがたかったのは、それまでの利用者が誰1人他の介護保険事業者に移ることなく、「私はライフ・ケア協会で支援を受けたい」って意思表示をしてくれたんです。たくさんの事業所、大きな企業とか全国規模のチェーンなんかもできた時期なんですけど、うちの利用者さんは全員うちを選んでくれたんですよ。「介護保険に移ってもこれまでと同じ人にサービス受けたい」って。うちが介護保険に入ったのが間違ってるか、間違ってるへんかは、その時はわからなかったですけど、やっぱり利用者が選んでくれたっていうのが、一番の財産であり宝物です。

2000年4月の介護保険参入にあわせてNPO法人化して、その時に『倫理綱領』を制定しました。団体設立当初からの「ともに生きるくらしをめざして」の理念を忘れないように、お金儲けに走らないように。2000年7月だからもう20年以上前やけど、言葉とか考え方とか、今見ても全然古くないんです。例えば「人権の尊重」とかね。当時の理事長の今井先生は、「いくら介護保険の事業者になるとか専門職になるとかいてもね、ボランティアな精神や気持ちは、人の豊かさに必要なので持ち続けられるように」って、それはもう常に言われていました。

その思いが端々に現れている『倫理綱領』

【前文】

私たち、神戸ライフ・ケア協会は、住民参加型在宅福祉ボランティア団体として、1982年に設立され先駆的に取り組んで参りました。

これらの活動は、我が国における既存の社会福祉サービスの在り方を大きく変革し、新しい市民社会をめざした、ボランティア活動推進の原動力となってきました。

これからの市民のニーズに応えるため、NPO法人としての公共性、ボランティアマインドを自覚し、地域社会と共に歩む団体として信頼に応え続けられるよう、ここに倫理綱領を定めます。

尚、この倫理綱領は、新しい世紀の始まりを機に、NPO法人神戸ライフ・ケア協会すべての会員が決意を新たにし、策定したものです。

【理念と目的】

設立当初からの「ともに生きるくらしをめざして」「利用者との対等な関係」「継続性」を理念とし、「共生・参加型市民社会」の

更なる発展と、「みんなで創る社会」に新しい価値を見いだす。

【条文】

1. 人権の尊重と擁護

私たちは、子ども、障がい者、高齢者、異文化に属する方々等、すべての人々の人権を尊重し権利を擁護します。

2. 自立支援と自己実現

私たちは、利用者との対等な関係を築き、自立を支援しその人らしい生き方、自己実現ができるよう努めます。

3. 会員の資質の向上

私たちは、常に心のもった質の高いサービスが提供できるよう、研修と自己啓発を行うとともに、会員同士の相互理解を深めるよう努めます。

4. 本協会・福祉NPOの社会的評価の向上

私たちは個人個人は、ともに資質を向上させ利用者のニーズに応え、且つ先駆性、独創性を発揮するよう努めます。これらの努力が、地域社会のニーズに応えることであり、ひいては本協会や、我が国の福祉NPO活動の社会的評価の向上につながることを自覚します。

5. 本協会が実施する事業との関係

本協会が実施する多様な在宅福祉、地域福祉に関するプログラム等の、諸事業に対しては、ボランティア精神を遵守し、NPO法人の組織の下において、公正に行われるよう努めます。

6. 福祉コミュニティの構築

私たちは、地域社会の一員としてよりよい福祉コミュニティ、豊かな市民社会をめざし関係団体、諸機関とも連携しながら、その構築に努めます。



神戸ライフ・ケア協会 設立40周年記念

5

【放課後デイサービスと生活介護サービス開始】

神谷：子どもへの支援を始めたのは1993年。

西部地区で、赤ちゃんとお母さんのケアと一緒にする訪問の子育て支援の『すくすくケア』を始めたんです。1995年の震災後には「実家が被災した」とか、「誰も見てくれる人がいなくて」とって電話がいっぱい入ってきて、活動を東部地区にも広げました。

でもこれもね、赤字がずっと続いててね。

介護保険になる前に、市から依頼されて、コーディネーターの研修などで、「訪問介護とは、ホームヘルプとはこういうものですよ」ってノウハウをレクチャーして、その対価に少し助成金をいただいて運営してきたんですけど。

やがて、市の方針から助成金が打ち切られることになって、収入は利用者からの1時間60円ぐらいしかない、じゃあどうするって。介護保険に参入したのも、そういう背水の陣というか、崖っぷちに立たされたところも実はあったんです。

子どもの事業もずっと赤字で、主婦が中心でやってきたものが、若い職員を採用すると人件費もしっかりと払わないといかんでしょ。どうしよう、赤字どうしよう、何かできないかなって時に、若い時から障害のある子どもに関わってきた有田さんが「障害のある子どもたちの放課後の居場所をやってみない」って言ったんです。「今やったらできるんちゃうか。これが2、3年後やったら、もう経営的にも体力的にも新しいことにチャレンジするのは難しくなるやろ、今よ」って言うたやんね、あの時ね。

有田：障害のある子どもの放課後の居場所が、その当時は全然なかったんです。ちょうどそのころNPO法人でも居場所放課後等デイサービスができるように制度が変わって、今しかないと。

神谷：あちこち行って見せてもらって教えてもらって2012年8月に放課後デイサービス「ジャングルくらぶ」をスタートしました。その当時はね、金銭的にも少し黒字ができるようになりました。で、同じ場所で小1から高3まで一緒っていうのは、ちょっと無理があるよねって、近くに「リトルジャングル」っていう小学生の放デイを開設したんです。

平成24年7月20日 ジャングルくらぶ開所式



でもその後、世間では放デイをしたらお金になるよって感じで、建設会社とか福祉に全く関係のない業界もどんどん参入してきて、区内でも当初は10か所もなかったのにすぐに50か所ぐらいに。英語とかお稽古事みたいな放デイもたくさんできてきて。

有田さん：「ここしかない」から「選べる」に変わって、しかもおいしいとこだけ、「この曜日のこれは楽しそうやからここに行こう！」っていう、そういう時代になってしまったんですね。だから、1週間に1回か2回来る子どもでいっぱいになって、利用登録者が40名くらいで、週1回でも支援計画は40名分作らなきゃいけない。で、1日の利用人数でいうと多い時もあるけども2、3人の時もあって。利用が1人でも(基準の)職員を置かなきゃいけないし。色々対応策を考えながらやってきましたが、結局2022年、始めて10年で閉めることになったんですね。

神谷さん：だんだんね、ちゃんと運営できるだけの収益になる話からならない話になってくる。介護保険もそうだったけどね、国はね、お金の出るところにメス入れるでしょ。だから、うまくいっていることも、どんどんやれなくなってくる。昔ちょっとずつ貯めたお金があったから、なんとかそれを取り崩しながらやってきたけど、「もうこんだけ赤字やったら持たへんよ」って、閉めたのはそこが大きいです。決断するまでは、寝られないほど悩んで、まさに断腸の思いでした。

ジャングルくらぶに來ているのは重度の障がいの方が多かったんで、スタッフはお金はいらんからこの子らだけは見てあげたいとずっと言っていました。どこでも受け入れてもらえるお子さんは大丈夫なんやけど、なかなか受け入れの難しい方もいらしたのでね。

卒業した重度障がいのある高3の子達の行き場がないっていうことで、ジャングルくらぶを閉じた後、入れ替わりにもうひとつ生活介護の第2ジャングルを作って、送迎して朝から夕方まで利用してもらっています。職員も常勤が2か所で6人ぐらいかな？パートさんも6人ぐらい。重度の方が多いので職員も多く配置しました。そんな感じなのでね、決して利益が出るものではありません。

【NPOを取り巻く厳しさ】

神谷さん：やっぱり次の世代のことを考えた時に、若い人たちがやりがいを持って働けるかっていうところが、いつも気がかりです。どこにも負けないぐらいのお給料を払いたって気持ちはあるんです。NPOやからってね、安い給与じゃなくて、働いてる人がここで働き続ける、生活もちゃんとできるっていう風にしたいって思いはものすごくあるんです。ケアマネやヘルパーの方は、過酷な仕事してますでしょ、この暑い中。

でも、若い人がずっと働き続けられるような給与を出したいと思って、実際にそこまで出せへんし、ボーナスなんかそんなに出せない。1円でもたくさん渡したいと思うんですけどね。

訪問介護の報酬もね、国はぱん！と下げたりしてるでしょ。国は処遇改善の方であげてるからって言うけど、郵便代に交通費とか、経費いろいろ値上がりしてる中で運営していくわけやから、ほんとに大変な状況になる。行政補助をつけるとか何か対策してもらわないと、もう訪問介護の事業所は大変です。

国は効率化を求めているでしょ。効率化したらもっと給料上がるからこういう働き方をしなさいとか、無言の圧力みたいなのをどんどんかけてきているように感じます。効率化するためにどんどん新しいものを取り入れなさい、そういうものの支援普及をして押してくる。テレビの宣伝でも、訪問介護1件20分ぐらいの短時間でバーっと回るような事業者もでてきて効率化を言ってる。制度に利用者の生活を併せるのではなく利用者の生活に制度があわせられるようになってほしい。

時代にあわなくなってるかもしれないけど、介護職、専門職としてのスキルを高めるために勉強したりするのも大事だし、ライフ・ケア協会としての理念、たとえば「ともに生きる暮らし」とか「利用者との対等な関係」とか、そういうのも大事にしていきたいと思ってるのね。やっぱりここが好きやから、こういう考え方が好きやからって来てくれる人もいるし。

昔のやり方がとか歴史がこうやからとか、そんなことを今に持ってこようとは思わない。新しく取り入れられるものは取り入れて、でも守るべきものは守る。この部分は取り入れたいけど、これはちょっとあかんやろっていうところを選択してやっていけたらいいと思っています。

【これからやりたいこと】

神谷さん：生活介護の保護者の方は、障害のある若い人がショートステイできるところが欲しいとか、年老いた親と一緒に入れる施設やグループホームが欲しいと言われますね。そういう施設もできてきてはいるけど、やっぱり本人に合うかどうかとところかね。で、やっぱり「ライフ・ケア協会さんがやってくれたら、ずっとこういう形で活動されてとこだしつくってよ」って簡単に言われます(笑)

お金があったらの話になるのですが、自分たちが年をとって仲間と一緒にいるようなところをつくりたいんですよ。

私も認知症にもなるかもしれないし、そうなった時にもちょこっと横に座らせてもらって、みんなでなんやかんやしながら安心して一緒に暮らせるような場所があったらほんとにいいよなって思うんです。障害のある人も入れるし、保護者の方もちょっとしたときに自分が何かできる、私も何かの時は利用したりできる、そういうところをやりたいな。

昔から年に1回、ここで地域の音楽会をしてるんです。この秋もね、近所の人とか障害持ってる人とか一同に集まって、ちょっとの時間やけど、すごく楽しんで歌ってて…もうそんな姿見たら涙出そうになってきてね。昔から長くボランティアをしてくれてはった人とか、みんなだんだんちよとずつつ年をとっていきから。

皆どんな状況になってもね、相談できたり、ショートステイもできるちょっと大きめの家でね、そういう皆で一緒に安心して暮らせる場所がほんとにできたらいいよなって思うんです。

神戸ライフ・ケア協会



1982年、全国にさがけ住民参加型在宅福祉ボランティアグループとして神戸市東灘区で設立。いち早く有償ボランティアでの介護支援の組織化を進め、地域での助け合い精神をベースにしながら介護や子育て支援に取り組んでこられました。

1999年にはNPO法人化し2000年にはそれまでの任意団体のボランティア活動に加え、介護保険の訪問介護等の各事業を開始。

その在宅介護のノウハウを生かし、研修等で地域の専門職を育て、居宅介護支援や高齢者の総合相談窓口『地域包括支援センター』などの事業を展開。放課後等デイサービスを10年間開所し現在は障がいのある人たちの生活支援にも力を入れています。



『保険の付帯サービス』

多くの保険会社が用意している、加入者への付帯サービス。

「聞いたことはあるけど、利用したことない」「付いていることを知らない」と言う方も多いでしょう。
実は各保険会社の付帯サービスは、普段の生活に役立つ様々な種類のサポートが用意されているんです！

（実際に私もよく利用しており、友達にもオススメしています♪）

しかもこのサービスは、被保険者（保障を受ける人）だけでなく同居のご家族も利用できたりします。

様々なサービスがありますが、その中でもオススメなものをご紹介します。

これらサービス利用料は無料！

① 24時間電話健康相談サービス



医師・看護師・保健師などの経験豊かな相談スタッフが、24時間・年中無休で《健康・医療・育児・メンタルヘルス・介護など》に関する相談を電話で受けてくれます。医師から投薬をされたが、問診だけで投薬されたのでちょっと不安なときにお薬名を伝え、症状を伝えるとお薬の効果や副作用など教えてくれます。

② セカンドオピニオンサービス



専任のスタッフが、経験と知識をもった専門医からセカンドオピニオンをうけられるようサポートをしてくれます。また必要に応じて、専門医の紹介もしてくれます。
（サービス利用料は無料です。医療機関への紹介状発行にかかる費用は自己負担となります）

③ がんに関するサポート



がん治療相談・がんPET健診サポートサービス・こころのサポートなど
がんに関する専門スタッフがさまざまな面でサポートしてくれます。

④ 糖尿病に関するサポート



糖尿病に関するさまざまな質問・相談が電話でできます。保険会社によっては、必要に応じて専門医や医療機関を紹介してくれます。

⑤ 介護・認知症に関するサポート



ケアマネージャーなどの相談スタッフが、介護・認知症に関する相談を電話で受けてくれます。
保険会社によっては、全国の介護施設や介護サービスについて電話で相談・情報提供をしてくれます。

まだ他にも色々とサービスがあります。

これらは、加入時のパンフレットに記載されていたり証券と案内が同封されていたりします。

生命保険は人生の中でも高い買い物とも言われています。

使えるサービスはしっかりと利用して、

家計のお助けになるようにぜひ役立ててください。

西宮のウェブメディア「西宮流(にしのみやスタイル)」編集室から見てきた西宮のことを、連載させていただいています。

『2024年・100周年』という言葉で検索してみたら、今年100周年を迎える企業は、空調機器のダイキン工業やお菓子メーカーのブルボン、総合玩具メーカーのタカラトミーなど、なんと2000社以上あるようです。

さて、話題を西宮に変えて「今年100周年を迎えた西宮の・・・」と言えば、阪神甲子園球場と阪急甲陽線が100周年です。

甲子園球場は、わずか5か月ほどで完成させたそうですが、完成した1924年が十干十二支の甲子（きのえね）だったことから『甲子園』と名付けられました。

「野球の聖地」という言葉で語られる甲子園球場は、阪神タイガースの本拠地でもあります。元々は高校野球の開催の為に造られた球場だったんですね。

なので、夏の甲子園大会に間に合うようにと1924年8月1日に竣工しています。

1915(大正4)年に豊中球場で始まった全国中等学校優勝野球大会（現在の高校野球大会）は年々人気が高まり、球場が手狭になったことから1917(大正6)年の第3回大会からは、西宮市（当時は鳴尾村）の鳴尾運動場に場所を移しました。そこでも収容しきれなくなり、新しい球場を造る

必要ができたことから、ちょうど廃川の枝川・申川跡地を取得していた阪神電鉄が今の場所に建設したという経緯のようです。

2007年秋～2010年春にかけて大きな改修工事が行われ、照明灯や銀傘などもすっかり変わり、2021年には照明がLEDに変わったことで、バックスクリーンの大画面とも連動したダイナミックな演出が楽しめる球場になっています。

甲子園球場は、[小連体・中連体](#)が開催され、最近では『20歳のつどい』も開催されていますので、西宮市民にとっては本当にいろいろ思い出のある場所になっています。

阪急甲陽線の沿線は、今は高級住宅地として人気のエリアとなっていますが、開業当時は甲陽園（撮影所や演劇場などがあった。）も苦楽園（苦楽園温泉があった。）も共に行楽地でした。終点のレトロな甲陽園駅は、2003年に「近畿の駅100選」にも選ばれており、アニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」シリーズの聖地ともなっています。

また来年は西宮市が市政100周年となります。次の100年に向けて、若い人たちに希望が感じられるような記念の年となって欲しいと思います。

※[小連体・中連体](#)：それぞれ年に一回西宮市立の小学校・中学校の生徒だけが球場に入って体育ができる特別な日

写真 甲子園球場 左 1974(昭和49)年【西宮市情報公開課提供】 右 蔦が育ってきた2024(令和6)年





畑中咲楽さんからのメッセージ ～関西学院高等部・大学時代にボランティア参加～

みやっこ食堂さんの活動を始めて知ったのは5年前、高校3年生の頃のことでした。スピーチ大会の題材で子ども食堂について扱ったことをきっかけに、活動に興味を持ち、近所の子ども食堂に制服のまま尋ねてみたところ、門前払いを喰らいました。落ち込んでいた帰り道にたまたまネットで見つけたのが「みやっこ食堂」でした。ボランティアの募集もないのに、「高校生なんですけど、何かお手伝いをしたいのでボランティアに行ってもいいですか？」と電話をかけ半ば強引に押しかけたところ、「ぜひ！」と迎え入れてくださったのが中島さんです。



コロナ禍の子ども食堂で

最初の方こそ、高校生にできることなどなく、ただただ存在していただけでしたが、少しずつ厨房に入れていただけるようになり、子どものお世話を任せていただけるようになり、私にもできることが増えていきました。

子どもたちは想像以上に早く私を受け入れてくれ、大人でもない、子どもでもない、そんな絶妙な立ち位置にいる私は「心許せる近い人」として確立されていきました。

学校での悩みごと、家庭での悩みごと、両親にも友達にも話せない悩みの相談に乗り、学校のお勉強と一緒に取り組み、子どもたちと食堂の皆さんはさまざまな形で私を必要としてくれました。

地域の子どもとあまり触れ合う機会なく育ってきた私にとって、子ども食堂での経験一つ一つすべてが新鮮でした。と同時に、これらはすべて地域社会におけるさまざまな問題について考えるきっかけともなりました。

比較的「住みやすく、安心できるまち」であるこの西宮市にさえ、子ども食堂の需要がこれだけ存在すること。

小さな社会からも、大きな社会からも今にも溢れ出しそうな小さな命が数え切れないほどにあること。こうした問題は実際に足を踏み入れた人にしか気が付きません。それ自体が、日本社会が見逃している、見逃そうとしている根深い闇なのではないでしょうか？

2025年にはついにGDPがインドに越され世界5位となる非資源国日本にとっての唯一の財産は「次世代を担う子どもたち」です。

どうかこうした子どもたちにもっともっと目を向け、社会から溢れ出さないような社会を作ってほしいと私は願っています。

子どもたちの悩みは、次の日本の悩みであり課題です。

みやっこ食堂のような、地域の子どもたちに本気で向き合い、子どもたちの苦しみと悩みに寄り添ってくれる場所がもっともっと評価され、支援される街づくりを目指してほしいと願います。

私もこの食堂に来て日本の現状を知り、少しでも次世代の子どものために何かをしたいと思い大学時代にオンラインの英語教室を起業しました。今は子供だけでなく大人に向けての授業もしていますが、環境や生活に言い訳することなく、すべての子供たちが平等なチャンスを得られる日本であってほしいという願いは今でも変わっていない私の信念です。

「高校生だった私にできることは、誰にでもできること」です。

私一人の力は小さいですが、大人数の力は大きいです。

子どもたち一人一人が安心して過ごせる社会が来ることを心から願っています。

この記事を読んでくださった誰か一人にでもこの想いが届きますように。

最後になりましたが、こうして想いを綴る場所をくださった中島さん、学校帰りの私を「おかえり」といつも温かく迎えてくださったボランティアの皆さん、そして食堂の子どもたちにこの場をお借りして、改めて感謝と御礼を申し上げます。

これからも、みんなの心の居場所「みやっこ食堂」が大切な場所で在り続けることを心より願っております。

活動へのご協力

■ ボランティアで協力！

ホームページからか
お電話でお問い合わせ
ください

ホームページ



■ ご寄付で協力！

認定NPO法人への
ご寄付は、税制優遇
の対象となります

寄付

